

BOOK REVIEW

『イエロー・フェイス』

村上由見子 著 (朝日新聞社 1300円)

日米開戦 50 周年にあたる 1991 年 12 月 7 日をわたしはロサンゼルスでむかえた。この日、50 チャンネルもある各テレビ局はほとんどどこも競って同じ 1 本のハリウッド映画を放映した。フランク・キャプラ監修のプロパガンダ映画『汝の敵を知れ——日本篇』である。完成にてまどって、終戦直前わずか 2 週間アメリカで公開されただけのこの映画は、日本の時代劇からニュース映画まで、さまざまな映像素材を縦横無尽に引用して、この東洋の小国がいかにか危険なファシスト国家であるかを力説する。なかでも圧巻なのはディズニー・プロダクションによって付け加えられたアニメーション部分である。そこでは高速度撮影の細菌培養シーンのように全世界に八紘一宇の屋根をのぼす日本の軍国主義の野望がえがかれ、日本地図のうえには巨大な日本人がそびえたつ。そしてその彼の目が例の丸眼鏡をかけた細い吊り目なのである。

村上由見子の新著『イエロー・フェイス』は日本人、アジア人がハリウッド映画においてどのように表象されてきたかを丹念にたどってくれる。細い吊り目、出っ歯、丸眼鏡の 3 点セットは、今日、日本人を「肖像」化するにはあまりにも手垢のついたステレオタイプだが、そうしたネガティブなアジア人表象のステレオタイプ化がこの 100 年たらずの映画史においていかにおこなわれてきたかを本書は豊富な具体例で検証する。

本書で扱われるハリウッド映画はじつに 250 本以上。量的には申し分のないリサーチである。そのなかには 1930 年代に延々と続編がつくりつけられた中国人探偵「チャーリー・チャン」シリーズや日本人国際警察官「ミスター・モト」シリーズもふくまれている。いずれもほとんど日本未公開だが、とりわけピーター・ローレが主役「元賢太郎」を演ずる「ミスター・モト」シリーズは、

今後日本版ビデオが出てさらに議論が重ねられるべき重要な作品群である。

しかし問題はスウェーデン出身の俳優が中国人探偵を、ハンガリー出身の俳優が日本人警官を演じたということにはない。リアリズムを標榜する映画においてすら、「本当(本物)であること」はほとんど問題にはならない。表象一般において問題になるのは、つねに「本当(本物)らしさ」である。どう見ても日本人には見えないピーター・ローレがミスター・モトを演じていたころ、日本映画にも紅毛碧眼役を得意とする青山杉作がいたではないか。彼が『鞍馬天狗 黄金地獄』や『阿片戦争』で演ずる慇懃無礼な西洋人は、戦時中のアジア人観客のあいだで「西洋人なるもの」として流通することにおいて意味があった。東洋人は東洋人が(あるいは西洋人は西洋人が)演じるべきであるという主張は、表象の問題であるよりも前に政治的な問題なのである。

かくしてアジア人とアジア文化がハリウッド映画においていかにか歪曲され戯画化されてきたかを克明につづる本書は、必然的に以下のような政治的問いを引きださずにおかない。すなわち西部劇はネイティヴ・アメリカンをどのように表象してきたか。ハリウッド喜劇映画の大御所フランク・キャプラは戦時体制化のために「黒人」をどのように融和し、どのように鼓舞したか。あるいは大学教授はカレッジ映画でどのように表象されてきたか。女家庭教師は英国映画史でどのような位置をあたえられてきたか。さらにはアイヌ民族は日本映画においていかにかえがかれてきたか。本書は、こうしたありうべき無数の問いを、映画という表象の歴史のなかで問うことへと読者をかりたてる刺戟的な書物である。

加藤幹郎(かとう・みきろう / 京都大学助教授)

